

# 國學院大學學術情報リポジトリ

現代語訳「死にさうだ」に躊躇した理由はどこに：  
夕顔巻地の文の「わななき死ぬべし。」にも問題が

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘, Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000717">https://doi.org/10.57529/00000717</a>

# 現代語訳「死にさうだ」に躊躇した理由はどこに

— 夕顔巻地の文の「わななき死ぬべし。」にも問題が —

中村幸弘

## 一 夕顔巻「わななき死ぬべし。」の今泉・現代語訳

光源氏は夕顔と荒れた院で一夜を過ごすことになったが、その夜、突然、夕顔は息絶えてしまった。光源氏は驚愕し、後悔するが、どうしようもない。夕顔の侍女・右近も、前後不覚に陥っている。

夜半よなかも過ぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは、まして松の響こぶかき木深こぶかく聞こえて、気色けしきある鳥のから声に鳴きたるも、梟ふくろうはこれにやとおぼゆ。うち思ひめぐらすに、

こなたかなたけ遠く疎ととましきに人声はせず、などてかくはかなき宿やどは取りつるぞと、くやしさもやらん方なし。

右近やどはものもおぼえず、君につと添そひたてまつりて、わななき死ぬべし。また、これもいかならんと心そらにてとらへたまへり。我ひとりさかしき人にて、思しやる方ぞなきや。(小学館・新編日本古典文学全集『源氏物語』①夕顔・

一六九)

右傍線部「わななき死ぬべし。」について、今泉忠義『源氏物語 語法篇』<sup>①</sup>は、以下に紹介するように施注している。小稿は、その施注に見る「死にさうだ」で通るかどうか。」の意図

を讀みとり、古典語助動詞「べし」の用法等と現代語助動詞「そ  
うだ」の用法等とについて觀察と考察とを試みようとするもの  
である。なお、古典作品からの引用本文は、右の『源氏物語』  
夕顔に同じく、新編日本古典文学全集本に拠ることとする。

ここで、その『源氏物語 語法篇』が日本古典の古注の体裁  
に倣って、取り立てた語句を抜き出して、本文からは離れ  
て注記だけから成っていることをあらかじめ確認しておくかな  
ければならない。現代人は本文を讀み進めてから、必要に応じて  
活用するのが頭注なり脚注なりであるが、この著者は、古注の  
体裁を借りて、語法に関する疑問を書き遺したのであった。以  
下に、その注記を紹介する。

わななき死ぬべし―死にさうだ―で通るのかどうか。今に  
も死にさうに見える、といふなら、例の直叙だ。

その「死にさうだ」で通るかどうか。」は、「死にさうだ」  
では、広く読者に理解してもらえないかもしれない意にも讀み  
とれる。この現代語訳としては適訳ではなさそうだがぐら  
いに讀みとったほうがよいであろうか。続いて、「今にも死にさう  
に見える」と改訳しているところからは、「べし」を、「今にも

：そうに見える」と捉え直している、と見ることができ。そ  
のように視覚で捉えた描写として讀みとるなら、この文章の展  
開にふさわしくなる、といっているようにも見えてくる。手書  
き原稿のままであるので、その「見える」の下の読点は受け括  
弧に改めなければならぬ。「直叙」は、この場合、登場人物・  
右近の動作と見える描写の配慮がなされていないことをいつて  
いるのであろう。

## 二 「べし」の訳語としての「そうだ」が広まった 契機

多義の古典語助動詞「べし」の訳語として現代語助動詞「そ  
うだ」が広く定着したのは、昭和四十四年だった。中西宇一「べ  
し」の意味―様相的推定と論理的推定―<sup>②</sup>は、「べし」の意味  
を大きく二種に分けて、「ソウダ」の意味を表す〈様相的推定〉  
と「ハズダ」の意味を表す〈論理的推定〉とにしている。その  
自説を述べるに先立って、当時の大方の認識の例としてか、昭  
和三十三年刊行の日本文法講座（明治書院）6の『日本文法辞  
典』の「べし」の項から、その七種の意味と訳語とを引いてい  
る。①当然「スルハズダ」「スルニチガイナイ」、②予想（予想）

「キット〜スルダロウ」「スルニキマッテイル」「スル予定ダ」、  
 ③適当「スルトヨイ」、④可能「スルコトガデキル」、⑤義務「シ  
 ナケレバナラナイ」、⑥決意「シヨウ」「スルツモリダ」、⑦命  
 令「シナサイ」の七種である。それを「ソウダ」と「ハズダ」  
 とに絞ってくれたのである。〈意志〉を表す「スルガヨイ」「シ  
 ヨウ」があっても、それは〈ハズダ〉の系列であるとして、「ベ  
 シ」は、〈様相的推定〉の「ソウダ」と〈論理的推定〉の「ハ  
 ズダ」とに絞られたのである。

それまでも、「ベシ」の訳語に「そうだ」を用いる訳者が  
 いなかったわけではないが、二種に分けた一つに「そうだ」が  
 当てられたという点で、その〈様相的推定〉の「ソウダ」は注  
 目され、採用された。「わがやどに盛りに咲ける梅の花散るべ  
 くなりぬ見む人もがも」(万葉・八五二)「をりてみばおちぞし  
 ぬべき秋はぎの枝もたわわにおけるしら露」(古今・二二三)  
 などの「ベシ」は、「梅の花」「秋はぎの枝」など自体を原因と  
 する〈自然的様相的〉推定を意味するといっているのである。そこで、  
 「散りそうになった」「落ちてしまいうさうだ」と訳すことになる、  
 というのである。万葉・八五一番歌は旧来もそうだったが、古  
 今・二二三番歌は、それまで「落ちてしまいうさうだ」か  
 「きつと落ちるにちがいない」だった、ともいう。

その「ベシ」の意味―様相的推定と論理的推定―は、『万  
 葉』第七一号(昭和四十四年七月)に発表した「ベシ」の推  
 定性」をまとめたものであると、中西自身が述べている。  
 そこには、いっそう豊富な用例と詳細な論述とがあった。

さて、『源氏物語 語法篇』の著者は、「ベシ」の訳語を、い  
 つごろから「さうだ」にしたのであろうか。

### 三 『源氏物語』地の文の「ベシ」一般と夕顔巻「死 ぬべし。」と

論理的必然性や客観状況から確信をもって推量するのだから、  
 (〈だろウ〉では弱い。(へちがいない)でなければならぬ。  
 古典文法書の教授資料などが、長く、広く、そういつてきてい  
 る「ベシ」である。「肯し」語源説に反対はないにしても、そ  
 の多様な意味は、どのような変遷の結果として存在しているの  
 であらうか。

いま、限られた範囲の傾向かと思うが、『源氏物語』地の文の、  
 そこで言い切られる終止形「ベシ」を概観したとき、それは、  
 圧倒的に「なるべし」である。断定の助動詞に下接しているの

だから、用例を見なくても、客観的な論議拠をもった推量と見え  
てくるであろう。

(1) 右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。

(1) 桐壺・三二二

(2) …、やむごとなく切に隠したまふべきなどは、かやうにお  
ほぞうなる御厨子などにうち置き、散らしたまふべくもあら  
ず、深くとり置きたまふべかめれば、

二の町の心やすきなるべし。(1) 帚木・五六

(3) 少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後身なるべし。

(1) 若紫・二〇七

(1) は、「右近の司の宿直奏の声聞こゆる」理由を、作者が読  
者に向けて解説しているのである。(へからであるにちがいない)  
と、「から」を入れて現代語訳したい。(3)もまた、そうである。  
(2)は、空欄部に(へさきにお見せになった手紙は、)ぐらいの表  
現を補って読んでいくことになる。次に、その「なるべし」が  
挿入文に現れる用例を引いておく。

(4) 八月十五夜、隈なき月影、隙多かる板屋残りなく漏り来て、

見ならひたまはぬ住まひのさまもめづらしきに、

「         暁近くなりにけるなるべし。」隣の家々、あ  
やしき賤の男の声々、目覚まして、…。(1) 夕顔・一五五

こども、その空欄部は、「隣の家々、あやしき賤の男の声々  
聞こゆるは、」ぐらい表現が想定されよう。一文を書き進めて  
いる途中で、作者が急に解説の必要を感じて、挟み込んだので  
ある。「なるべし」は挿入文の文末としても、しばしば見ると  
ころである。

地の文「べし」の上接活用語の、次の用例群は、形容詞の補  
助活用の連体形である。

(5) おろかならず契り慰めたまふこと多かるべし。(1) 帚木・

一〇二)

「おほつかなかるべし。」(1) 若紫・二四五)「多かるべし。」(1) 紅葉賀・三三〇)「多かるべし。」(2) 葵・二〇)などもあって、「多かるべし。」が多い。いずれにしても、地の文の「べし」は、  
情況が理解できるように書き添えた文に用いられている。したがって、動詞に付く用例も存在はするが、その多くは、尊敬語動詞や尊敬の補助動詞を添えたもの、抽象的な事象の存在をいう「ある」、継続の助動詞「たる」を添えたもの、「心地」などの名詞に続くサ変自動詞の「す」などであって、形態は動詞であつても、形容詞・形容動詞性を有する諸動詞なのである。会話文に多い「つべし」「ぬべし」も、時に「ぬべし」を見ると  
いう程度である。

(6) 中将の君、面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙おちぬべし。(①紅葉賀・三三一九)

「涙」という第三人称主体の情況描写である。その巻には、手をすり合わせて「あが君、あが君」と言う老女を笑う頭中将を描く「笑ひぬべし」。(①紅葉賀・三四二) も見られるが、これも第三人称主体の情況描写である。

さて、問題の「死ぬべし」については、助動詞「ぬ」の語源「去ぬ」が動詞「死ぬ」の語源「息去ぬ」の「去ぬ」と重なるところから、「死にぬべし」に相当するともいえる。そこで、右近という第三人称主体の情況描写だといえそうである。だが、『源氏物語 語法篇』の著者は、まず、ここで、違和感を覚えたのではないか、とも思えてくるのである。

#### 四 「死ぬべし」という表現とその主体の人称

中西論文の〈様相的推定〉の用例にも、「死ぬべし」は引かれていた。用例(7)として引く。

(7) 武庫の浦の入江の渚鳥羽<sup>すとり</sup>ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし  
(万葉・15三五七八)

右用例について、中西は、「話し手自身に存する自発の様相を意味する場合」としている。その「死ぬべし」は他者をいうのではなく、自己についていって、第一人称主体文のなかに用いられている「べし」ということになる。

そこで、『万葉集』全歌に見る「死ぬべし」歌を拾い上げると、右の(7)を含めて十五首に及ぶ。そのうち十二首が確かな第一人称主体文のなかに見える用例である。さらにいうと、第一人称代名詞「我(は)」「我(が)」「我(が)」を直上に置く用例までが見られた。

(8) ますらをの 聡<sup>と</sup>き心も 今はなし 恋の奴<sup>やつ</sup>に 我は死ぬべし  
(12二九〇七)

(9) 常人<sup>つねびと</sup>の 恋ふといふよりは 余<sup>あま</sup>りにて 我は死ぬべく なりにたらずや (18四〇八〇)

(10) すべもなき 片恋<sup>かたこひ</sup>をすと このころに 我<sup>わが</sup>が死ぬべきは 夢<sup>いみ</sup>に見えきや (12三一 一一)

(8)は、第四句「恋の奴に」の恋の奴が、訳者には人間の命を奪う怨霊に見えてきて、「わたしはとり殺されそうだ」と現代語訳されている。(9)は、世間一般の人には「恋ふ」であるものが、自分の場合には、外見からも「わたしは死にそうになってしまっていないか」と、相手に喚起を促している。(10)は、「わたしに死にそうなのは」という、「べき」が準体法となってい

る用例で、これもまた、第一人称主体の「死ぬべし」である。

ここで、(9)・(10)について再考すると、それぞれ、相手に向けて問いかけていて、その相手の側からは、その「死ぬべく」や「死ぬべき」は、第二人称主体とも第三人称主体ともなるであろう。人称主体を転換させて、受けとめることになるのである。

この人称主体の転換は、むしろ、第三人称主体の「べし」から第一人称主体の「べし」への転換であったと見ている。「死ぬべし」については、上代において既に、多くが第一人称主体文の用例となっていた。そして、時に、自身を客観視して、用例(11)は、「思ほゆ」を添えることにもなる。ただ、その「思ほゆ」は、歌詠む第一人称主体が客体化した第一人称の「死ぬべし」を受けていることになろう。

(11) 恋ふること 増される今は 玉の緒の 絶えて乱れて 死ぬべく思ほゆ (21三〇八三)

次の時代を迎えて、その「死ぬべく思ほゆ」は、「思ほゆ」が縮約化して「死ぬべくおほゆ」に定着する。『伊勢物語』の、その文は、多く登場人物としての昔男が主体となる、第三人称主体の文である。

(12) むかし、男、わづらひて、死ぬべくおほえければ、  
つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思は

ざりしを (百二十五)

あの歌物語の、最終段である。『古今和歌集』歌としては、哀傷・八六一番歌の業平歌で、ここでは、「病して弱くなりける時よめる」という詞書で紹介される。『大和物語』百六十五段にも見えて、そこには「死なむとすること、今々となりてよみたりける。」とある。

さて、『源氏物語』は、小稿の起点となった「わななき死ぬべし」を加えて、八用例の「死ぬべし」を見せてくれる。そのうち、四用例が「死ぬべくおほゆ」という連語性の表現であった。それに準ずる「死ぬべく思ざる」も見られて、併せて五用例である。遡ると、『万葉集』歌の(11)や『伊勢物語』の(12)などを引き継いでいることになる。

(13) 御几帳きぢょうの背後うしろなどにて聞く女房、死ぬべくおほゆ。(③行 幸・三三四)

(14) この聖も、丈高たけたかやかに、まぶしつべたましくて、荒らかに  
おどろおどろしく陀羅尼だらに読むを、船本「いであな憎や。罪の深  
き身にやあらむ、陀羅尼の声高きはいとけ恐ろしくて、いよ  
いよ死ぬべくこそおほゆれ」とて、やをらすべり出でて、こ  
の侍従と語らひたまふ。(④柏木・二九三)

(15) 世を知りたる方の心やすきやうにをりをりほのめかすもめ

ざましう、げにたぐひなき身のうさなりやと思しつづけたまふに、死ぬべくおぼえたまうて、落葉の宮「うきみづからの罪を

思ひ知るとても、いとかうあるまじきを、いかやうに思ひなすべきにかあらむ」と、いとほのかに、あはれげに泣いたまうて、(4)夕霧・四〇八

(16) 句宮「…。心に身をもさらにまかせず、よろづにたばかりまほど、まことに死ぬべくなむおぼゆる。…」などのたまふ。

(6)浮舟・一三三

右四用例、いや、『伊勢物語』の(12)を加えた五用例だけからでも、「死ぬべくおぼゆ」がほぼ定着しているものと感じとれよう。一定の定着した言い回しとなっている。しかも、その基本形の用例は(13)だけで、(14)・(16)はそこに係助詞「こそ」「なむ」を介在させていて、(15)は尊敬の補助動詞「たまふ」を添えている。

(13)は、弘徽殿女御や、その兄弟たちの世界に迎え入れられた近江の君が己を知らない物言いをして、父の内大臣からも嘲笑されて、御几帳の背後にいる女房たちにまで笑われている場面である。その「死ぬべくおぼゆ」は、おかしさをこらえる女房たちの様子を（死にそう（なくらい）に思われる）といっているところである。（死にそう（なくらい）だと思われる）の

ほうがいっそう望ましいが、その問題は改めて取り上げることとする。

(14)も(16)も、会話文に見る用例である。(14)は、病の柏木が加持に奉仕する聖の読経にまで恐怖を感じて、柏木自身が（死んでしまいそうに思われる）と言っているところである。(16)は、狂熱の一夜を明かしてしまった句宮がわが身を心のままに振る舞うこともできなくてあれこれ考えめぐらしているうちに、句宮自身が（死んでしまいそうに思われる）と言っているところである。

(15)は、夕霧が夫をもった経験ある宮ということと気楽に言い寄ってくることを情けないわが身と落葉の宮がお思いになつて、（死んでしまいそうにお感じになつて）というところである。尊敬の補助動詞「たまふ」が付いているところから、その「おぼゆ」も落葉の宮の（お感じにならないではいらつしやれない）意のものとして読みとれよう。

以上からも、会話文に見る用例が第一人称主体での「死ぬべし」であるのに対して、物語地の文の用例は、第三人称主体の「死ぬべし」である。また、物語地の文の「死ぬべくおぼゆ」の「死ぬべし」については、作者が登場人物の心内を含めた情況をそのように描写しているものと読みとることができる。そ

の(15)の同義異表現も見られた。

(17) 出でたまはん心地もなく、飽かずあはれなるに、またおはしまさむことも難ければ、京には求め騒がるとも、今日ばかりはかくてあらん、何ことも生ける限りのためこそあれ、ただ今出でおはしまさむはまことに死ぬべく思さるれば、

この右近を召し寄せて、。(6)浮舟・二二八)

右用例の傍線部も、物語地の文の用例であるので、第三人称主体の「死ぬべし」である。ところが、その地の文が、テキスト頭注七が解説するように間接話法となっていて、「ただ今出でおはしまさむはまことに死ぬべしと思さるれば」と読んでいくことになるので、その「死ぬべし」は第一人称主体の「死ぬべし」ということになる。京で行方が知れないと騒がれても今日は宇治を出ないという匂宮の決意を直叙するのに、「恋しげくまさりて今は玉の緒の絶えて乱れて死ぬべく思ほゆ」(古今六帖・五)を借りて表現しているのである。その『古今六帖』歌も、原歌は、小稿で既に引いた用例(1)の『万葉集』歌だったのである。

『源氏物語』には、さらに会話文のなかの(2)明石・二二五)と心内文のなかの(6)浮舟・一三〇)とがある。いずれも、当然、第一人称主体の「死ぬべし」である。

さて、夕顔巻「わななき死ぬべし。」は、右近、つまり第三人称主体であることは当然として、当代の物語文章としては、「わななき死ぬべくおぼゆ。」であったろうと思えてくる。河内本の当該箇所を吉澤義則『対校源氏物語新釈』(平凡社・昭和二十七年)で確認すると、右側に「わななき事限りなし。」とあって、「わななき死ぬべくおぼゆ。」ではなかった。河内本の親行も気づいてくれなかったのである。そこが「わななき死ぬべくおぼゆ。」であったら、今泉『源氏物語 語法篇』も、そこを取り立てることはなかったであろうか。

## 五 現代語助動詞「そうだ」についての、時代による認識の相違

助動詞「そうだ」も、昭和二十一年に現代かなづかいの制定を見るまでは、「さうだ」だった。『語法篇』の著者・今泉は、生涯歴史的かなづかいで貰った。品詞としても、例えば『大言海』(富山房・昭和八年)は、「さう」という見出しで、接尾語とし、その語源も和語「状」の音便だった。『大辞典』(平凡社・昭和十一年)の見出しは「ソー」で、「さう」とあったが、やはり接尾語である。

国語辞典で最も早く助動詞「さうだ」を立項したのは、『明解国語辞典』（三省堂・昭和二十七年）だったろうか。ただ、徹底した表音式かなづかいで、その見出しは「そおだ」である。漢字表記欄に「相だ」とあって、字音「相」を語源と見ていたことになる。当時、「さう」の語源をどう見るかは揺れていた。

例えば『岩波国語辞典』（岩波書店・一九六三年）は、語釈・用例の末尾に▽印をつけて、「相」とも書いたが、「さま」の音便ともいう。」と添えてあった。実は、その見出しも「さう」であって、「さうだ」は、いわゆるカラ見出しで、「↓さう」となっていた。

第二次大戦中の『中等文法 一』（文部省・昭和十六年）は、十六（助動詞の接続と活用（二））として、「さうだ」を取り立て、様態と伝聞との読み分けに留意させている。殊に、「様態」については、〈さういふ様子だといふ意味を表す〉と、解説まですべて付けている。この『中等文法 一』が戦後の『中等文法 口語』（文部省・昭和二十二年）に引き継がれる。

学習参考書もそれに倣うようになっていったが、長く抵抗も続いた。今泉忠義『標準国文法』（旺文社・昭和二十九年）は、「さうだ」「さうだ」の項の末尾に、【参考】「ようです・さうです論」として、「私としては「さうだ」「さうだ」を一つの助

動詞と見ることには、不賛成で、「よう」「さう」を接尾語とし、これに「だ」が付いたものというように考えたい。」といっている。通説に従って、「さうだ」「さうだ」を助動詞とするが、さうなら、「さうです」「さうです」も助動詞としなければならぬ、ともいつている。

『中等文法 口語』の、「さうだ」の意味を指している「様態」という用語は、術語といってもよいものだが、一般には理解しにくい難解な用語である。さういうこともあってか、さきに引いた『岩波国語辞典』など、いわゆるポケット版は、その意味を「推量」としていた。とにかく、何点かのポケット版がそうだった。そこに、久しく待望された『日本国語大辞典』（小学館・一九七二年）が全二十巻本として揃ったが、「さうだ」の意味は「様態」でしかなかった。

中西論文が〈様相的推定〉の「べし」は「ソウダ」と訳すのがよいと方向づけたのは、その時期だった。その「ソウダ」は、どういふ「さうだ」をイメージしていたのであろうか。

今泉『源氏物語 語法篇』は、「死ぬべし」を〈死にさうだ〉と現代語訳して、その夕顔巻の現代語訳としては不適当と思われるのであろうか、躊躇したうえで、〈今にも死にさうに見える〉と言ひ換えている。〈今にも…（に）見える〉とすること、

どういう意味が加えられて、適切な現代語訳となったのである  
うか。

その時期、森田良行『基礎日本語 意味と使い方』(角川書店・一九七七)の刊行が進行していて、その『基礎日本語2 意味と使い方』(一九八〇年)<sup>4</sup>に、「そくだ」の意味と使い方を読むことができ、学ぶことができた。その全三巻が揃って、すべてを収めた森田『基礎日本語辞典』(角川書店・一九八九年)となった。それまで、様態の「そくだ」だけだった、その助動詞が、外在する対象の現在の様態を問題とし、□形容詞や、□状態動詞に付いた場合は、眼前の事物や他者の様態を、□動作動詞に付いた場合は、動作・作用が実現する様態を現在呈していることをいい、その動作・作用が近い未来に成立する気配にあることを表すものと見えてきた。

そのころから、国語研究は日本語研究となり、日本語教育が多領域の若年層によって担われ、国語科の言語事項は国文法を巻末の図表に追いやった。外国人に向けての日本語教育が盛行する時代を迎えて、現代日本語研究の必須性が高まりを見せることになっていだろうか。とりわけて、様態「そくだ」の研究が顕著だったように感じている。

ここで、懸念されてきたのは、様態「そくだ」の使用された

年代への配慮である。様態「そくだ」は、「そくだ」だけで担う意味が決まるのではない。形容詞・形容動詞に付く「そくだ」は、近代語からの歴史を有する。動詞に付く「そくだ」は、それより遅れる現代語である。『日本国語大辞典第二版(8)』(小学館・二〇〇二年)は、近世からの「さうなり」時代の用例を引くが、それらは限られた用例である。

やがて、同社としては『大辞林』(三省堂・一九八八年)に吸収してしまう『広辞林第五版』(三省堂・昭和四十八年)の「そくだ」は、様態の助動詞としたうえで、①見かけから性質・状態を判断する意を表わす／②動詞に付いて、動作・作用の開始についての判断を表わす／③将来への予測を表わすというように、語義を三ブランチとしていた。そのころ、たまたま、井伏鱒二『黒い雨』(新潮日本文学71)に、「もう大した力もなさそうに見えた。」(141)「矢須子のリュックサックも重そうに見えた。」(151)など、様態「そくだ」が「見える」に連接する用例を見て、見かけから状態を判断しての描写と理解した日があった。動詞に付く「日が沈みそうに見えた。」「夜が明けそうに見えた。」「転びそうに見える。」「泣きそうに見える。」などが併せて浮かんできた。そして、その後、今泉『源氏物語 語法篇』が「死にさうだ」を「今にも死にさうに見える」と言い換えた

理由も、ここから見えてきた。その「…そうに見える」によって、主体の人称も第三人称しか考えられなくなるからである。

## 六 「死ぬべくおぼゆ」の読解

「べし」の「べ」は、副詞「うべ」「むべ」の「べ」で、その「べ」が形容詞型活用をしたものが助動詞「べし」であるとする、「べし」の語源説がある。語源説はともかくとして、「べし」は上接する活用語と一語化して形容詞性を生じているかに感じることがある。助動詞「まし」「まほし」にも共通するところある性質である。「べし」の連用形「べく」を末尾とする文節が「思ふ」などの上に位置するとき、その「べく」を末尾とする文節は、形容詞連用形一般と同じように、終止形に引用の格助詞「と」が付いた表現に言い換えることができるからである。

この読解法については、既に、四に引いた用例(7)に関連して触れてきたところである。ここでは、テキスト頭注にいう間接話法として紹介したが、時枝誠記『古典解釈のための日本文法』(単元九 連用形の用法(三)「思ふ」「云ふ」「知る」「侍り」等)の上にある連用形)が教えてくれる読解法である。その用例(7)を時枝読解法に従って書き換えると、次のようになる。

(17) … 〈京には求め騒がるとも、今日ばかりはかくてあらん、何ごとも生ける限りのためこそあれ、ただ今出でおはしまさむはまことに死ぬべし〉と思さるれば、…。

右において心内文と読みとった部分には「おはしまさ」という尊敬の補助動詞が用いられてしまっているが、作者の匂宮への敬意がそこにまで及んでしまっていたことになろう。問題の「死ぬべく」は、時枝読解法の要領で、終止形「死ぬべし」を引用の格助詞「と」が受けていることになって、その「死ぬべし」の主体は、第三人称ではなくなって、第一人称としての匂宮ということになる。

以下、念のため、用例(13)から(16)までについても、書き換えを試みる。

(13) 御几帳の背後などにて聞く女房、〈死ぬべし〉とおぼゆ。

(14) …、集末「…、いよいよ〈死ぬべし〉とこそおぼゆれ」とて、…。

(15) …、〈げにたぐひなき身のうさなりや〉と思しつづけたまふに、〈死ぬべし〉とおぼえたまうて、…。

(16) …、匂宮「…、まことに〈死ぬべし〉となむおぼゆる。…」などのたまふ。

(14)・(16)は、会話文のなかなので、その「死ぬべし」の

主体の人称は、第一人称であつて変わらない。ところが、(13)・

(15)は、誰が誰のことを「死ぬべし」と感じているかが確認されなければならぬ。(15)は落葉の宮が自分のことを「死ぬべし」と感じていらつしやるので、第一人称としての落葉の宮ということになる。それに対して(13)は、作者がその女房のことを「死ぬべし」と感じとつているので、その主体の人称と人物は、第三人称としての女房ということになる。物語地の文の「死ぬべくおほゆ」には、二とおりあつて、時枝読解法に従つたとき、その相違が見えてくる。もちろん、それは、「死ぬべし」とおほゆ」の下に「たまふ」が付くかどうかの違いであり、「おほゆ」の主体人称の違いでもある。そうではあつても、テキスト本文どおりの「死ぬべくおほゆ」「死ぬべくおほえたまうて」については、第三人称主体の描写ということになる。ところで、『源氏物語』には、いま二用例、「死ぬべし」の用例を見ている。まず、テキストどおり引用する。

(18) 供人「……かなしき妻子めこの顔をも見て死ぬべきこと」と嘆く。

(2) 明石・二三五

(19) 女、いとさまよう心にくき人とも見ならひたるに、時の間まも見ざらむに死ぬべしと思し焦がるる人を、心ざし深しとはかかるを言ふにやあらむと思ひ知らるるにも、あやしかりけ

る身かな、誰も、ものの間こえあらば、いかに思さむと、まづかの<sup>う</sup>上の御心を思ひ出できこゆれど、……。(6) 浮舟・一三〇)

(18)は、須磨退去の光源氏が暴風雨が襲い、供人たちが嘆いているところである。「死ぬべきこと」は、「死ぬべし」の詠嘆表現である。(19)は、匂宮の心内文の後に、浮舟の心内文が二か所も続く表現である。その匂宮の心内文(時の間も見ざらむに死ぬべし)は、(17)に引いた「まことに死ぬべく思さるれば、」を受けていて、匂宮の性情をいうために用いた表現手法であろう。いずれも、その「死ぬべし」の主体は、第一人称である。

夕顔巻の「死ぬべし」は、物語地の文に現れた「死ぬべし」であつた。「死ぬべくおほゆ」に相当する第三人称主体の「死ぬべし」である。地の文のままでは、違和感を感じてよい「死ぬべし」である。

七 息を引き取ることにほならない「死ぬべし」「死にそうだ」

『源氏物語 語法篇』の著者は、夕顔巻の施注語句として「わななき死ぬべし」を引きながら、「死ぬべし」だけにゴチと印

してある。そして、直ちに、「死にさうだ」で通るかどうかが」と躊躇するのである。その躊躇には、あるいは、夕顔巻から切り離された、「わななき死ぬべし。」からも切り離された、現代語「死にさうだ」だけを意識してしまったのではなかったろうか。それは、現代人にとつての「死にさうだ」であつた。

「死にさうだ。」を耳にしたとき、人は誰しもが、その発言者が自身の現況を訴えた発言と受けとるであらう。第一人称主体の「死にさうだ」である。現代語「死にさうだ」が第三人称主体として用いられるのは、刃物か何かで刺されたりなどした被害者の現況を視聴者に伝える記者の声ぐらゐに限られよう。文字を媒体とした伝達には、「死にさうだつた。」はありえても、

「死にさうだ。」はありえない。現代語「死にさうだ。」は、自身の体調等から自身が自身だけで推定判断した発言である。自覚を根拠にした推定判断である。

体調からの自覚としては、「吐きさうだ」がある。第三人称主体の「吐きさうだ」は、医療現場の医師・看護師に限られる。高熱で「倒れさうだ」は第一人称の用例が始どだが、老朽ビルが「倒れさうだ」は、第三人称以外考えられない。「落ちさうだ」も、第一人称主体にも第三人称主体にも現れる。「私は今、崖から落ちさうだ。」と「花瓶が棚から落ちさうだ。」とである。

「挫けさうだ」は、多くが自身の精神面の見通しの暗さをいうことになろう。

主体を明示しない「殺されさうだ」は、第一人称主体と見てしまつてよいであろうか。「叱られさうだ」「嫌われさうだ」も、さうであろう。概して、このような「さうだ」は被害者側に立つての表現ということになるが、誉褒とでもいうか、褒められる側にあつても用いるようである。「褒められさうだ」も聞くことができさうだからである。受身動詞に付く過程を経てか、可能動詞に付く「さうだ」は、「跳べさうだ」にしても「泳げさうだ」にしても、自身の実現度の見通しをいつていることになろう。

『万葉集』歌に見た「死ぬべし」は、恋の苦しみの辛さをいつていると見てよいであろう。四〇八〇番歌は、「恋ふ」という段階を越えて「死ぬ」という段階に至つてしまつたではないか、といつているが、それとでも、やはり、現実の死をいつているものではない。つまり、用例(7)から(11)まで、それら「死ぬべし」は、二九〇七番歌の恋の奴に〈殺されさうだ〉を含めて、いずれも、恋の苦しみの心理の現況を訴えているものであつて、生命活動の停止をいつているものではない。つまり、「死ぬべし」は、上代の昔から、〈辛くて、死ぬに相当する苦しみを味わつ

ている)意を担っていたのである。

『伊勢物語』から引いた用例(12)には、「男、わづらひて、」とあった。息を引き取る「死ぬべし」である。夕顔巻の「死ぬべし」も、間違いなく息を引き取る「死ぬべし」である。『源氏物語』の用例(16)・(17)・(19)も実際の「死ぬべし」で、匂宮が主体の「死ぬべし」である。用例(16)は、本文の順序としては用例(17)を受けた表現で、どちらも「まことに」を冠した「死ぬべし」である。

わざわざ「まことに」を冠するというほどに、「死ぬべし」は、「まことに」ではない表現が多かったのである。用例(14)も、柏木の発言に見る実際の「死ぬべし」である。用例(18)も、須磨での供人が妻子を見ることがないままの「死ぬべし」で、実際の「死ぬべし」である。

それらに対して、用例(13)は、身内の者たちからも嘲笑される近江の君の仕種が可笑しくて、その可笑しさを恠えきれない女房たちの様子をいつているのである。可笑しさを恠えきれなくして「辛くてたまらない」のである。用例(15)も、落葉の宮が一度夫をもった身だからと与しやすく思われることが情けなく思えて「辛くてたまらない」思いを「死ぬべくおぼえたまうて、」と表現しているのである。

現代人もまた、心労の業務が重なって、つい「死にそうだ」

と呟くことがある。(息を引き取りそうだ)ではない「死にそうだ」である。(死ぬに相当する苦しみを味わっている)「死にそうだ」である。一語の形容動詞と認定したい「死にそうだ」である。古典語「死ぬべく」も、「死ぬべくおぼゆ」が「死ぬべしとおぼゆ」と読みとれたところから、一語の形容詞と認定したい思いである。

## 八 小稿から見えてきた四つの小さな気づき

小稿が取り立てた事柄そのものが、結論といえるほどの提言のできるテーマではなかった。発見というには当たらない事実だが、その確認できた事実を気づきと呼んで整理することとする。

(1) 古典語「死ぬべし」は、『万葉集』歌などに見る多くが第一人称主体の用例だが、第三人称主体の用例としての夕顔巻「死ぬべし」も存在した。

(2) 中古の物語地の文に、その第三人称主体の夕顔巻「死ぬべし」を見るが、趨勢としては、『源氏物語』地の文などに見るように、「死ぬべくおぼゆ」という表現となつていたり見られる。

(3) 『源氏物語 語法篇』が「死ぬべし」の現代語訳「死にさうだ」に躊躇したのは、第三人称主体であることが表現できていないのではないかと思つたからか、と推測している。

(4) 「死ぬべし」にも「死にさうだ」にも、〈今にも息を引き取るように見える〉意ではない用法の用例が存在し、〈辛くてたまらない〉意の形容詞・形容動詞に相当する表現となつている。

不揃いな整理であるが、今後の読解にご活用いただけたらありがたいと思つている。「べし」とか「さうだ」とかいう、助動詞だけでは見えてこないところから試みた、小さな読解の取り組みである。

○小稿は、「死ぬべし」と「死ぬべし。」となど、単に語句を引用したものと背景となる文を意識して引用したものとを区別してある。事情をご理解いただきたい。

著で、手書き原稿をオフセット印刷した著書である。

(2) 中西字「二べし」の意味―様相的推定と論理的推定―(明治書院「月刊文法」1の四・昭和四十四年)に倣つて、当時の多くのポケット版古語辞典が訳語に「さうだ」を採り入れたことを実感として記憶している。

(3) 厳密には間接心内文表現とでもいったらよい表現で、「ただ今おはしまさむはまことに死ぬべし」を心内文と見て、「と思さるれば」で受けていると見ることになる。

(4) 森田良行『基礎日本語2 意味と使い方』(角川書店・一九八〇年)「さうだ」の項の㊦(動作動詞に続く場合)のb(自身に関する精神的・生理的感覚の「さうだ」)の第一用例「腹が空いて死にさうだ」から、小稿の七(息を引き取ることにはならない「死ぬべし」「死にさうだ」)に気づかせていただいた。

(5) 時枝誠記『古典解釈のための日本文法』(至文堂・昭和二十五年)の単元九(連用形の用法③「思ふ」「云ふ」「知る」「待り」等の上にある連用形)は、長きにわたつて活用させていただいている。ただ直覚的に体感した結果を法則としてしている事項が多いように思う。この単元も、そう感じられるが、それによって、納得いく読解ができたことに感謝している。

注

(1) 今泉忠義『源氏物語 語法篇』(桜楓社・昭和五十二年)は著者の遺